

僕の友達

宝塚市立御殿山中学校 2年 平野 圭悟

ぼくには、一つ歳下の友達「はるくん」がいます。はる君とは、小さい頃から一緒に公園に行ったり、ご飯を食べに行ったりしていました。はる君はとても活発で、めちゃくちゃ運動神経が良くて、ゲームも上手です。公園で一緒に遊んでも、ぼくには怖くて出来ないような遊具で、楽しそうに遊べていました。ぼくもはる君のように、運動が得意になれたらいいのにと、何度も思った事があります。

たまには、けんかもします。はる君が、楽しいと思う事が、ぼくにとっては怖いと感じる事だったりするからです。やめてとお願いしても、砂をかけてきたり、たたいてきたりします。滑り台の途中で、足を引っ張られた時は、泣いてしまった事もあります。けんかになって、ぼくが泣くと、はる君のお母さんから、何回も何回も、ごめんねと言われました。いつもそれが、つらかったです。ぼくが泣かなかったら、ごめんねって言わないで良いんじゃないかなと思いました。ぼくなりには、たたかれても痛くないように、バケツをかぶってみたり、工夫をした時もあります。はる君のお母さんは、もう一緒に遊んでももらえないかなと、いつも思っていたそうです。だけど、ぼくは一度もはる君を、嫌いになった事はありません。それは、はる君に悪意が無い事を、上手く説明はできないけれど、ぼくは分かっていたからです。ぼくが、一緒に遊んだり、バーベキューしたり、ゲームしたりしたかったからです。

ぼくが幼稚園のころに、はる君が、自閉症と診断されました。自閉症は、人とのコミュニケーションが苦手だったり、言葉をうまく話せなかったりする事があるようです。発達障がいの一つだと、はる君のお母さんから聞きました。その時のぼくは、まだ小さかったので、障がいを理解できないかと思って、母たちは相談して、自閉症についての説明を、「はる君の心や脳の中に少しやんちゃをしてしまう病気のようなものがあるんだよ。」と、教えてくれました。そんな事が分かる前から、ぼくにとっては、大好きな友達だったので、それを聞いて、特に何かを思ったり、ぼくの中で、何かに変化したりは、なかったです。

言葉をうまく話せなかった友達が、三年間、療育という、発達支援センターに通って、どんどん会話が出来るようになりました。初めてぼくの名前を呼んでく

れた時、うれしすぎて、興奮してしまいました。それまで、言葉がうまく出ない時も、ぼくはコミュニケーションに、困った事は、ありませんでした。はる君が言いたい事を、ぼくが知りたくて分かりたかったから、しっかり聞くようにしたし、はる君の気持ちを、ぼくから確認するようにしていたので、本当に困った事はありませんでした。

だけど、小学生になったくらいから、周りの友達に、何を言っているか分からないと、からかわれるようになったみたいです。それからはる君は、学校では、ほとんど話すことはしなくなったと聞いてすごく悲しかったです。三年間はる君とお母さんは、療育で頑張っていました。最初は通う事も大変で、泣いて暴れたりもしたと言っていました。子供たちが、給食を食べている時は、はる君のお母さんは、同じ教室でお弁当を食べていたと言っていました。少し聞きとりにくい時もあるけど、何と言っているのか分からないと言うのは、ひどいと思います。母は、子供は素直だけど、時に残酷な事も言うと言いました。悪気がない場合もあるから、その子を責める訳にもいかないと言いました。でも、人に対して優しい気持ちで接する事は、どんな小さい子でも大切な事だからそれぞれの家で話してもらえたらいいねと言いました。

きっと世界中の人がみんな同じ考えで、同じように行動するのは無理なのかもしれません。でも、障がいのある人もない人も、人間はみんな一人では生きていません。家族に支えてもらったり、友達に助けてもらったり、どんな人でも、絶対にだれかに守ってもらった事があると思います。だれかの優しい心に、うれしい気持ちになった事があると思います。ぼくは何度かあります。声に出してだれかに何かを伝える時は、出来るだけ否定的な言葉じゃなくて相手を思いやる言葉を選ぶ必要があると思います。日本語には優しい言葉がいっぱいあります。まずは僕自身が思いやりのある優しい言葉を使うように意識していこうと思います。